

# 七組極楽のあまり風 プロジェクト！2018

福島に安心な野菜とお米と気持ちを送る

昨年度のあまったお米がありましたら、福島へ送りませんか？  
送付は極楽のあまり風プロジェクトが引き受けます！

チェルノブイリで放射線由来と証明されている小児甲状腺がんが、「甲状腺検査サポート事業」で272人出ていることがわかりました。事故前は100万人に3人でした。それでも放射線が原因とは考えにくいと繰り返し、人々を収束していない事故原因の近くまで帰らせている私たちの国。そうやって補償を打ち切っていくのです。放射能の飛び交う中に、人々は置き去りに。本当のことから目をそむけず、できることで協力しましょう。



## 8年目の スタディーツアー

帰還困難浪江町津島地区

交通安全祈願の仏像が、閉じられた  
津島中学校前の道路脇に立っていた。

誰かがここで交通事故に遭ったのかな。子どもを守りたくて地元の人たちが建てたのかな。

この中学校に来る子はもういない。だから子どもが交通事故に遭うこともない。祈りの姿が夕日の中にぽつんとたたずむ。

このへんに避難した浪江町の人々は、強い汚染にさらされた。スピーディーの放射性物質拡散予測は出ていたけれど、地元の人々には伝えられなかった。取り返しのつかない無用な被ばくにさらされた。

子ども脱被ばく裁判原告のあの子はここにいたんだって。5才の時、大

切なおもちゃも放り出したまま、家をあとにして。あれから8年、もう中学一年生。

仏様、今度はどうかあの子たちの将来を守ってください。心配したけど大丈夫だったって、親子ともども笑えるように。

2018/12/18 後藤由美子

忘れない

「被ばく」のこと



野菜

お米

極楽の

あまり風

ご協力を  
お願いし  
ます！

今年度は9909円からのスタートです。送料にあてる1人一口100円カンパもお願いします。

連絡 090-8797-0162 (後藤明照携帯)  
第七組極楽のあまり風プロジェクト

# 「原発事故は今も終わらない」

七組教化委員長 武田典久  
被災者支援の集い部会代表 後藤由美子

福島第一原発事故はなぜ起きたのか、事故時どのようなことが起きたのか。福島をはじめ多くの市民の懸命の努力で起こされた東京電力刑事裁判によって、それが明らかにされました。その責任のありかが、多くの人の証言で浮き彫りになりました。

その追及の中心となった福島原発告訴団団長武藤類子さんのお話を聞き、真宗ブックレットいのちを奪う原発等の編集委員である長田浩昭さんと対談していただきます。案内を教区・一般へ拡大し、多くの人と重大な問題を共有できればと願います。

日時 2017年3月1日(金) 13時～16時

場所 山陽教区同朋会館 講堂 (姫路船場別院本徳寺境内)

〒670-0044 姫路市地内町1番地 TEL: 079-292-3690

講題 「福島の実況と結審を迎える東電刑事裁判」

講師 武藤類子さん (福島県三春町在住) 参加費 500円

プログラム 13時 正信偈同朋奉讃、挨拶  
13時20分～ 武藤類子さんお話 (休憩15分)  
14時45分～ 対談 長田浩昭さん(京都教区法伝寺住職)  
16時20分 終わりの挨拶 恩徳讃 16時30分 終了

真宗ブックレットNo.9「いのちを奪う原発」  
No.13「原発震災と私たち」 発行 真宗大谷派  
宗務所出版部 (東本願寺出版部)



2012年(平成24年)6月8日 金曜日 13版 2

ひと

脱原発スピーチが世界に広がる

朝日新聞

武藤 類子 さん(58)



原発事故の前は小さな喫茶店だった福島県田村市の山里の自宅に昨秋、シカゴ大のノーマ・フィード教授が突然訪ねてきた。東京で9月にあった脱原発集会でのスピーチに感動した、米國でも話して、と。姉妹の再会のように2人は意気投合、シカゴ大での講演は今年5月5日に実現した。「いま隣にいる人とそっと手をつないでみて下さい。互いのつらさを聞きあいましょ」。集会のスピーチ「福島からあなたへ」はインターネットで何万回と再生され、各国で出版の話が進む。普段は山小屋で本を読むのが好きな物静かな女性は、6万人の聴衆を前に足がすくんだ。だが演壇に立つと「怒りを秘めた東北の鬼」

原発事故の前は小さな喫茶店だった福島県田村市の山里の自宅に昨秋、シカゴ大のノーマ・フィード教授が突然訪ねてきた。東京で9月にあった脱原発集会でのスピーチに感動した、米國でも話して、と。姉妹の再会のように2人は意気投合、シカゴ大での講演は今年5月5日に実現した。「いま隣にいる人とそっと手をつないでみて下さい。互いのつらさを聞きあいましょ」。集会のスピーチ「福島からあなたへ」はインターネットで何万回と再生され、各国で出版の話が進む。普段は山小屋で本を読むのが好きな物静かな女性は、6万人の聴衆を前に足がすくんだ。だが演壇に立つと「怒りを秘めた東北の鬼」

「輪が波紋のように広がった。福島に生まれ育ちながら、原発には無関心だった。東京の大学を出て故郷に戻り、養護学校の教師に。チェルノブイリ事故が起き、このままでいいのかと疑問は膨らむ。学校の防災訓練に原発事故の想定を提案したら職員会議で爆笑された。孤立感の中、脱原発運動に身を投じ、自力で山小屋を建てて退職、9年前に店を開いた。太陽光を使い、畑を耕し、自然のものを使ってきた。3・11はそんな生活のすべてを奪った。「私たちはヒバクシャになったのに加害者は？」。国や東京電力の刑事責任を問うための告訴団長になった。

文・写真 本田雅和